
海の夢

伴美砂都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海の夢

【NZコード】

N9176S

【作者名】

伴美砂都

【あらすじ】

工業地帯と港の近く、いつも曇天の海沿いの町で育った三人の少年少女のお話です。感受性故に傷ついて、思いやる故にすれ違う。私たちは、いつ大人になるのだろう。

海の夢

本屋の床がぬかるんでいた。

潮の匂いがした。

私の欲しい雑誌はいつまでも見つからなくって、地面の段ボール箱に貧相に積まれた子供用の折り紙のくしゃくしゃになつたビニールに嫌気がさしていたら、あなたはそれを買うと言つて笑つた。飽きた私は「ゆみちゃん」にラーメンを食べに行こうと言い、あなたは自転車に乗つて走り出した。私を置いて。

目が覚めたら泣いていた。

潮の匂いがした。

遠くから「コウン、コウン、コウン」と工場の音が聞こえて、私はベッドに体育座りで抱え込んだ膝に頬を付ける。

海と工場しかないこの町では涙も同じ匂いで、つまく区別がつかない。

一両しかない電車がガタガタと線路を鳴らして止まり、私は解放される。

三月の初めの昼下がり、冷たい風と温い日差し。駅長しかいない駅の駅長に定期券を見せたら、いつも敬礼が返つてくる。

ホームとほつたて小屋みたいな駅を通り抜けて、家路を急がない私は、海へ向かう。

「りんちゅあんび」歩いてんの

昨夜聞けなかつた声に振り向くと、着崩した学生服に赤いマフラーが見えた。

「私の通学路だもん、こい」

歩いていた堤防の上から言ひ、彼はふうん、と言つてせりと笑つた。してやつたり、と私は澄まして前を向く。作り笑いをしない彼の笑顔はレアだ。

「あなたは何してたの」

「りんちゅさんのストーカー」

「は？」

「うそ、散歩、といつか寄り道、といつか暇つす」

「あ、そう」

2時間田ぐりじにやつと戻つた現実が、ぼんやりと濃くなる。

「ゆみちゃん」ラーメンを食べに行こうよ、と私は言ひ。

「イッタ、」

自転車を引いて歩いていた彼はいこよ、と語り歩みを止め、私は道路と海を隔てる高さ一メートル三十センチの壁から飛び降りる。

「氣づくのは、私はあなたを笑わせたい。できるだけ多く。視界の端でテトラポットが揺れた。

住宅地と工場地帯のちょうど境田ぐらごにある「ゆみちゃん」は、工場で働く人の休憩時間と夜だけ混んでいて、あとの時間は空いている。

引き戸を引くと、湯気と膝骨の匂いがする。

「ひつしゃい

筋肉質のおじちゃんたる恰幅のっこおばちゃんが一人で經營している

「ゆみちゃん」は、私が生まれる前からやっているらしい。

おじちゃんとおばちゃんは本当に仲が良くて、いつも一人してがつはつはつ、と笑ってころ。

なんで「ゆみちゃん」なの、と訊いても答えてくれないおじちゃんは、おばちゃんのことを「みつちゃん」と呼ぶ。

おばちゃんの名前は「みつ」でござりし。

「おじちゃん、スペシャルつくね

イッタが語つと厨房からへいよー、と威勢のいい声が帰つてくる。豚骨スープにメンマ、ナルト、味付けタマゴと海苔ののったラーメンはおじちゃんに言わせると単なる豚骨ラーメンではなく、「ゆみちゃんスペシャル」なのだそうだ。

今の時期、受験生の合格祈願とかでナルトには「合格」の一文字が入っている。

おばちゃんが慣れた手つきでそれを薄切りにしていく。

駅と反対側にあるこの店には学生の客はあんまり来ないから、この時期工場で働く人たちが「ゆみちゃんスペシャル」を頼んでも強制的にナルトは「合格」になる。

「一太くん久しぶりじゃなー、受験の方はどんな感じなの」

「や、おかげさまっす」

イッタの返答に私は吹き出す。

「なにそれ

「・・・」

「あい、せうなの、高校はどこへ」

「や、専門っす」

「あらまあ、そつだつたの、おめでとう」

「ここ」と答えるおばちゃんに、イッタはびもっす、と短く会釈する。

どうやら、最初の返事は「おかげさまで、合格しました。ありがとうございます」とかなんとか言いたかったらしい。私はおかしくなつて、くすくすと笑う。

「つんちゅんせじゅ、受験のまつは」

「あ、私も、おかげさまっす」

言つと、おばちゃんはがつはつはつ、と笑つてあらあら、おめでたいわねえとナルトを三割増しの厚切りにした。

へいお待ち、とおじちゃんが言つて、私たちはしばらく黙つたまま三割増しのナルトが乗つたラーメンをする。

一月の初めに、私は電車で約四十分の公立高校に、イッタは都心の専門学校に合格通知をもらつた。

今年は私やイッタ以外にも推薦入試とか専門の子がけつこつ多かつたらしく、教室の中は半分受験シーズンの終わったような雰囲気を漂わせている。

公立高校の一般入試を控えている子も滑り止めの私立には受かつたりしてゐるから、少なくともうちのクラスにはあまりピリピリした雰囲気はない。先生たちも「気楽にやれよ」なんて、リラックスしたものだ。

そして受験勉強を名目にして家にこもる必要のない私たちは、短縮授業の午後をいい具合に持て余している。

「美紅は？」

「ゆみちゃんスペシャル」を食べ終わつて私が言つと、おばちゃんは黙つて上を指さした。

行つていい、と訊くといいわよ、と返ってきたので、私はおばちゃんにお金を渡して厨房の横の階段を上がる。

店の一階がおばちゃんたちの自宅になつていて、突き当たりに美紅の部屋がある。

美紅は小さいころから中学一年の途中まで私とずっと一緒にいて、

中学一年の秋から引きこもりになつた。

なぜかは知らないけれど、夏休みが終わって一緒に学校に行こうとしたら部屋から出てこなくなっていた。

そんなわけで、私は週一でゆみちゃん、つまり美紅の家に通う。

美紅の部屋は和室で、春夏は寒く秋冬は暑い。

ドアを開けると換気されないまま効き過ぎた暖房のむつとした臭いがする。

「みーくー」

部屋の奥に向かつて呼びかけると、毛布の塊がもそつと動いた。

「ういつす、元氣？」

やつぱり美紅は何も答えない。私は閉めたドアに凭れてしばらく返事を待つ。

暖かずれN室温にも慣れてぐん
十五分ぐんして、とこでしNと
から不思議だ。

ごおおとエアコンの音が聞こえて
少しおかげで眠くなる
毛布の塊

「・・・美紅、寒いの？」

返事はない。

「じゃあね、またくるね」

そう言つて部屋を出ると、廊下が寒かつた。

海水に浸食された跡に平野のできたこの土地では、「潮平」という名字が少くない。

「潮」とか「海」とかの字がつくのは昔から住んでいた「ウチ」の人、それ以外の名字の人は「ソト」の人、といって、昔は派閥争いみたいなのもあつたらしい。

まあ私たちの世代には関係ないことだ。海に近い町内の中学校を「ウチ中」、市街地の方を「ソト中」と呼んだのも昔の話で、私たちが小学校を卒業する年の初めに「ウチ中」は廃校になつた。おかげで電車通学になつて学生ばかりの満員電車に辟易する以外は、別になにも変わらない。

おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんの代からこの土地に住んでいふと言ふうちの父親は、この土地には腐るほどいる潮平の名字をもつて生まれてきた私に、輪廻、といふおよそ常識では考えられない名前を付けた。

小学校高学年か中学校一年の頃だかに自分の名前の由来を調べるとかいう宿題があつて、父親に尋ねたところ「名字がありきたりなので名前は覚えやすいように変わつたものにしたんだ」と自信満々に答えられ、それはそうだけどこの名字が多いのはこの町だけじゃないかと反論したところ寝たふりをされたので、グレして家出でもしてやううかと思つたがめんどうさかつたのでやめた。

そのときは美紅もあたしの名前には意味がない、と言つてずいぶん元気をなくしていたつけ。

それからは変わつた名前だね、と言われたときは見りやわかるけど輪廻転生の輪廻、生まれ変わるよつこ、とか、ほら、来世でいいことあるよつこ、とかでたらめに答えるよつこしている。

ただ、私は来るかわからぬ来世より今がいい。

たつた狭い世界に生きていた。悪いにしても、たかが知れている。

おじけやんとおせせやんに挨拶をして外に出ると、まだ田はあると
いつのにせりきよりだいぶ風が冷たくなっていた。

引き口を引くとすぐ堤防の向こうへ、海が見える。

海からの風は山にぶつかって、ひゅう、と鳴る。

イッタは店のちょうど向かいの堤防の上に座っていて、私と田が合
うと、よつ、と並んで手を挙げた。

「寒くない？」

手を挙げ返して並つと、イッタはそうねー、と並つて赤いマフラー
を巻き直した。

待たせてごめん、と言つと、いいよ、と返つてくれる。
いつもとき、「うん、だけじゃなくて、いいよ」と返すところが、
イッタは律義だ。

そのまま、私たちは駅前まで歩いて戻つて本屋に入った。

緩やかに現実逃避したいとき、私はファッショングラビア雑誌を買つ。 カラ
フルな紙面には、実在するけど実在しない理想の女の子の像が溢れ
ている。

このへんじゃ珍しく大きな本屋の自動ドアに入つてすぐ、女性誌の
コーナーで私の欲しい雑誌はすぐに見付かった。

「暇だな、俺らも

音楽雑誌のコーナーでしばらく立ち読みしていたイッタが寄つてき
て言つ。

いいじゃない、春は非日常に浸りたくなるの、と私は答える。この
猶予期間はいつまでも続かない、と。

まーそうだけね、といッタは言つて右手に持つていたロッキン・
オン・ジャパンをファッション誌の平台に載せた。

「折り紙・・・」

「ん?」

「ううん、なんでもない」

「折り紙欲しいの?」

「欲しくない」

「・・・」

「ねえイッタ、海行」^{ヒツヨ}

「またっすか

「だめっすか

「いいっすよ

そうして私たちは暮れかけた海沿いをまた歩き、テトラポットの上
に乗つて沖を見る。
イッタはひょいひょいと隙間を越えてその上を渡つていぐ。

海鳴り。

「うつむくと、聞こえたのか顔を上げた。

「ねえイッタ

「なこ」

「海、好き?」「

「普通つか

「ふうん」

「つんぢやんせ?」

「わかんねえっす」

割れたコンクリートのかけらをイッタが海に放る。かつん、と仲間にぶつかって、それは塩水に落ちた。

「なんか、お腹減った」

「まだ食つんすか」

「いのちこな、家帰つたらタジ飯なの」

「あ、俺もだ

ポケットから鍵を取り出して家のドアを開けると、石油ストーブと醤油の匂いがした。

プライバシー第一の我が家では誰も電気ストーブ点けておこしてやるうなんて考えないから私の部屋のフローリングは冷たいまま、殺風景な床には朝のまま、いや昨日、いやそれよりもっと前のまま、捨てられないものがいくつか転がっている。

たとえば死んだ猫の首輪とか初めて買った黒のマーキュアの瓶とか、三年前春の学校で美紅と撮った写真とか。

鞄に教科書をぽいぽいと放り込んで簡単に明日の支度を済ませ階下に降りると、おばあちゃんに会った。

おやおやりんちゅん、遅くまでお疲れさま、と言つおばあちゃんに、遊んでたんだけどねー、と言つてにやつと笑つてみる。

イッタを知らないおばあちゃんに、イッタに似せた笑いを見せる。それを知らないおばあちゃんは何事もなく、まあまあ、若いちは遊ばんとねー、などと言つて居間に戻つていぐ。

お腹減つた、と私が言つともうすぐご飯だよ、と後ろ姿から返事が聞こえた。

天然ボケのおばあちゃんと放任主義のお母さんと地味な女子高生のお姉ちゃん、女四人の食卓はなんとなく氣まずい。だけどおばあちゃんが大量に作った煮物は美味しい。

うちはお父さんがガリガリでお母さんが普通でおばあちゃんとお姉ちゃんがぱつちやりで、私は幸いなのかどうなのかどれだけ食べても太らないらしい。

おかげで私は毎週、とんこつたつぷりの「ゆみりちゃんスペシャル」を残さず食べることができる。

高校生ぐらいになつたら太るよ、と言われるのだが、そうしたらその時考えればいい。

お姉ちゃんみたいに毎日やつきになつて腹筋とかするのも今はめんどくさいと思つただけで、やりたいときにやればいい。

ある日、そういう適当なスタンスで生きる私のことをお姉ちゃんがめちゃくちゃに嫌いだつてことを知つてから、ますますそういう適当なスタンスで生きるのが私の毎日の課題になつた。それはたまに投げ出したくなるけど、たいていのことはゆるーく、ただ流れしていく。これはこれで幸せなのだ。

私は黙つてテレビを見ながら、よく煮えたタケノコを口に放り込む。テーブルに飛んだ煮物の汁を神経質にティッシュで拭くお姉ちゃんを見ないふりして、おばあちゃんとスマップの話題で盛り上がる。椎名林檎が好きな私はスマップは別にどうでもいいけど、おばあちゃんはクサンギくんが好きらしい。

おばあちゃん、修二と彰知つてると訊くと、知つてる知つてる、とおばあちゃんはここにこ笑つてテレビに出ている関ジャニエイトを指さす。

ジャニーズは嫌い、とお姉ちゃんが吐き捨てた。

卒業式の日は、どうしようもないぐらいの曇天だった。

雲が重くて、雨か雪でも降りそつなくせに降らなくて、吐く息の白が濃い。

寒い体育館で「仰げば尊し」を合唱しながら、私は海が見たくて仕方なくなつた。

体育館のあちらこちらから鼻をすする音が聞こえていたけれど、私は泣かなかつた。

ただ、式とホームルームが終わつて挨拶を済ますと、ひどく力が抜けた。

美紅のぶんの卒業証書は、教室でこゝそり私が受け取った。

「なんかすつごい解放感、といつか脱力感」

「なにそれ」

「なんだろうね」

「うーん、あたしは卒業寂しいのもあるし、高校どんなだろうってのも今から不安だけねー」

「ふーん」

まだ、なのかどうなのか、私には実感がない。

卒業アルバムの裏表紙の裏がカラフルなペンで埋まって、私もその応酬でクラスメイトの記憶の片隅を埋めていく。

「元氣でね。輪廻」とだけ黒のマジックで書いて、あとカエルの絵とか描いていたら、やっぱりおかしいわアンタ、と言われた。

どうやらクラス内での私のイメージは思つた以上に変人らしい。

「りんねちゃんはちょっと、いやかなり変わってるなあと思つてました」なんてダイレクトなメッセージに吹き出しつつ、「また会つたらよろしくね」とか「高校行つても仲良くしてね」なんかの常套句でさえこれから何年かして、この隙間風の通る校舎と、襟に三本ラインの入つたセーラー服と一緒に懐かしく、綺麗な思い出として思い返すことがあるんだろう。

幸いにして、愛想のない上に気紛れで変人と評される私でも、ここでは友達っていう人種に恵まれていたのだし。

窓の外、コンクリートに少しだけ日の色が差していて、私は喧噪よ

り高い位置に視線を置いてそう思つた。

そつしたら、さつき式のときには感じなかつた喉の痛みと同時に、泣きそうな気持ちが少し襲つた。

「イッタ書いて」

そういうと、彼は「りんちゃん卒業おめでと 海原一太」とマッキーの太字で書いてくれた。

なんといつか、上には上がいたものだ。

「あのや、あんたも卒業すんじゃん」

「あ

「何、マジボケ?」

「あー、じゃありんちゅん書いてよ

いいけど、と私もペンを握る。常套句のふりをした願い。

「イッタ卒業おめでと、これからもよろしく 潮平輪廻」

「ういう少女マンガみたいな気持ちやエピソードやなんかと一緒に、もつとの先の私にとつて、優しい郷愁になるんだろうか。
もしかしたら、失つてしまつたあとに。」

そう思うとさつきよりもっと泣きそうになつて、そんな私にイッタは、あーわかつた、悪かつた、と言つて卒業おめでと、のあとにいびつなスマイルマークを付け足した。

わけがわからぬ、と私は笑い、イッタはさつやと自分のアルバムを閉じた。

「ねえイッタ」

「なんやー」

「今日こじれかうり囃」

「暇つすよ」

「ゆみちゃん」に行かない、と私は言つ。
なんとか、美紅のここに行く、といつ言い方を私はできない、とい
うか、しない。

「いいよ」

「あ、一回帰つてからでいい、卒アルとか重いから、置いてくる」

「じゃー俺も帰るわ」

三時に駅でね、と言つて別れる。

イッタの家は私の家と学校とのちょうど真ん中ひつと我が家寄り
ぐらーのところで、だから彼は自転車通学だ。

別れを惜しんでか、お喋りに花を咲かせてなかなか帰らうとしない
女子たちの輪に、じゃあねー、と手を振つて、私は教室を出る。り
んねちゃんばいばい、またねー、といつ声に笑い返す。

人のいない廊下を歩く私は、また現実感のないまま変に脱力してい
る。

早く出てきたとは言つてもだいぶ長い時間教室に残つていたので、
電車はわりに空いている。

運転手さんの肩越しに線路の行く先を見守る私の反対側の端に、話したことのない隣のクラスの女の子が立っていた。

さつき弱く差した口が翳り、白く沸る風景の中を歩く私はまだふわふわしている。

高校の入学式まで約一ヶ月の、モラトリアム。

笑い出したくなるような気持ちと寂しいような気持ちが隣り合って、深呼吸してから家路につく。

歩きながら横に見る海も白く停滞していて、吐く息もまだ白い。堤防の上によじのぼつて、海を向いてしゃがみ込む。

港に行こうか、と思つ。

歩いて十分で、輸送用の船が出入りする港に行く。

ちょうど船の入っていない港は広くて、私はコンクリートの上を海の方へギリギリの位置まで歩いて、そこに座り込んだ。妄想してみると中途半端にしゃがんだ体勢の私は、すぐに海へ落ちる。

冷たくなったセーラーの袖に顔を埋めて口ずさむのは、むかじりつそりカセットテープで聴いた古い歌謡曲。

海鳴りよ

海鳴りよ

今日もまた

お前と

私が

残つたね

ここにいることにいくら違和感を感じたって、どこか他の場所にいる自分なんてとても想像できない。

私は、どこへも行けない。

漠然とそう思った私は、だけどイッタとの待ち合わせに遅れないよう、重い鞄を掴んで立ち上がる。

水面は、静かに波打つて青黒い。

家に帰つて階段を上るとトイレから出でてきたお姉ちゃんはやつぱり私をシカトして、自分の部屋も窓からの景色も遠く見える海もやつぱり停滞していた。

寒そう、と言われるベッドのアイスブルーのカバーに荷物を投げ出して、その中から想像した美紅の卒業アルバムの白い表紙裏に罪悪感に似たような感覚で、少し胸が痛む。

いい気になるんじゃない自分、と呟いたらびつしょうもなく人恋しくなつて、私は廊下に降りてお湯を沸かして、お皿ご飯代わりにインスタントのたらこスパを食べた。

お母さんはテレビを見ながら、冷蔵庫に牛乳プリンがあるわよ、と言つて、おばあちゃんが卵焼きを作ってくれるといつのでその言葉に甘えて、私の昼食は思つたより豪華になつた。

ほの甘い卵焼きはとつても美味しかつた。だけど、ストーブの点いているはずの居間はなんとなく肌寒くて居心地が悪くて、『馳走様、と言つた私は三分だけテレビを見て廊下に出た。

三時ちょうど、私は白のセーターやジーパンにブルゾンを着込んで駅前の電信柱に凭れていた。

イッタは時間ぴったりに来て、遅刻だ、と言った私に文句を言った。イッタは紫っぽいへなつとしたセーターにジャンパーを着ていて、私服を見慣れない私は新鮮な気持ちで隣に並ぶ。

再発していた人恋しさはイッタに会って十パーセントまで、薄れた。あとはさつと、口の押しつぶされそうな天気のせいだ。

「ゆみちゃん」に行くと、なんとか違和感を覚えた。

イッタが隣で「暖簾・・・」と呟く。そう言われてみると、紺地に白く「ゆみちゃん」と書かれた暖簾が、今日は外されている。なんで気付かなかつたんだろう。嫌な予感がする。お休みかな、と、言つた私の声はひどくちいさくて、イッタは「あ、でも、営業中だつて」といつて曇りガラスに掛けられた札を指さす。

私は少しだけ安心して、引き戸の取っ手に手を掛ける。

店内に入るといつも通りにスープと湯気の匂いがして、らつしゃい、とこうおじちゃんの声がして、私はイッタと並んでカウンター席に座る。

それでも落ち着かなくて、早く安心したい、と思つ。

なぜかわからないけど、そう思つ。さつきまで普通に見ていた灰色の海がまた見たくなつて、入口に目をやる。

がらつと戸を開けて近所の人らしいおじいさんが入ってきた。

「りんちゃん、突然なんだけどね、お店たたんで引っ越そうと思うんだ、おばちゃんたち」

ふつ、と視界が狭くなる。嫌な予感は的中したのに、声はどうか現実でないと心で響く。

「・・・美紅?」

うん、と田を伏せておばちゃんは頷く。

納得がいかない、と呟いた声は届いていないほうがきっとこい。

引っ越したつて美紅が部屋から出てくるかつて言つたりそんなのはわからぬにけど、このままここにいてもそれは絶望的だと思つ。おじちゃんにも、おばちゃんにも、びひむでできなんだと思つ。

おじちゃん、私にも。

おじちゃんもおばちゃんもけつじう年がこいつるから、美紅もこいつまでも引きこもつじやこられないとどうつ。

おじちゃんのじうじつした手がへいお待ひ、と差し出したラーメンには、薄切りの金枪ナルトが載つていた。

食べ慣れた味のラーメンを食べながら、私は鼻をすすつた。下された暖簾。教えてもらえなかつたお店の名前の由来。同級生のお父さんやお母さんに比べてだいぶ年を取つてゐるよつと見えるおじちゃんとおばちゃん。

そして思い出したのは中学校一年生の夏休みの課題、美紅の言葉、あたしの名前、には、意味が、ない、と。

「ゆみちゃん」は「由美ちゃん」だらうか、それとも、

憶測でしかない、と言い聞かせて、泣きたくない私はこいつも通りに「じちやうせめ」と挨拶をして店を出る。

“私の名前には意味がないの”

“私もだよ、まつたく、何考えてこんな名前つけたんだか”

“りんちゃんはいいじゃん、いい名前だと思ひナビな”

“でもさ、うちのお姉ちゃん由紀子だよ、コキコ。何の関係もないじゃんね、なんでコキコの下が輪廻なんだ”

“・・・関係ない方がいいじゃん、そんなの”

“まあやつだけじゃ・・・”

「イッタ、海が見たいよ」

イッタは黙つて私の手を引いてくれた。

浜に降りてすぐ、海は満潮になつた。
私とイッタはじわじわと上がる水面に追われるようにして、テトラ
ポットの上まで逃げた。

空は白に近い灰色で、やけに底冷えがして、油断すると歯がかちか
ちと鳴る。

「イッタ」

「うそ？」

「私は、ここから動けん」

「うそ」

「美紅やイッタやみんなみたいに、ソレから出て行けない」

「うそ」

「私は、ソレの海に縛りされている」

「・・・」

「・・・」

そうだな、トイッタは口を開いた。

その声は今想像したよりずっとずっと優しくて、イッタはそういうふうとこんな優しい口の利き方をする。

田を開いたら、涙みたいなものが一筋、鼻筋を通りて顎に伝った。

「りんちゃんがいないと、海が寂しがるからじゃない?」

ぐしゃぐしゃに泣きながら、私は口元だけで笑った。

りんちゃん、好きだよ、トイッタが海に向かって呟いた。

この町の三月はいつも曇り空だ。

だけどそれも終わりに近付いた今日は暖かくて、開け放した窓からぬるい空気が入る。

海沿いの道で車に乗り込むとき美紅はやっぱり毛布を被つていて、美紅、またね、と私が手を振つたら、りんちゃんまたね、と蚊の鳴くよつの声で返ってきた。

イッタは寮に送る荷物を作るとかで、あと三日で送らなければいけないのになんもしてねーや、と言つて私を苦笑させた。

私は去年買った不思議の国のアリスのイラストがついたメモ帳の一一番最後のページに、買ってもらったばかりの携帯電話の番号とアドレスを書いてイッタに渡した。

そのうちアイスブルーのベッドの上で雑誌をめくっていた私は、夕方に近付くにつれ冷たくなってきた外気に、窓を閉めに立つ。

いつか話を聞いて
思い出になつたなら
私たち いつか話をしよう
寂しさに負けたら
始めよう
また
始めよつ

コンポから流れ出すBONNIE PINKの歌声と重なるよつこ、
急に強く雨の音が聞こえた。

見ると窓の外の海は相変わらず白く煙ついて、人恋しくなる私はコンポの音量をひとつ下げ、ベッドに戻つて目を閉じる。
遠くでゴウン、ゴウン、ゴウンと工場の音が聞こえた。低い機械の音と雨の湿つた匂いは夢と混ざる。

少しだけ寒い部屋にあと少しだけの猶予期間。
真新しい携帯電話が、いちばん最初の着信音を響かせた。

海の夢（後書き）

引用

- ・中島みゆき「海鳴り」（アルバム「愛していくと恋つたくれ」より）
- ・BONNIE PINK「再生」（アルバム「Just a Girl」より）

鎌の月

果たされない約束をいくつしたら大人になれるんだろう、と、いつも思っていた。

小学校のとき理科の授業で、右側が丸かつたら上弦の月、左側が丸かつたら下弦の月、と習った。

帰り道に見上げた月は見事に真下が丸い細い月で、海に沈む鎌を思つた。

その日母親が一回目の、父親が三回目の離婚と再婚をして、母の連れ子だった俺は父方に籍を移して、連れ子を迎える側になつた。

一日にしていなくなつた兄は俺を一瞥してただ「じゃあな」と言い、一日にしてできた五歳の妹は俺を見ると泣き出した。

俺はどうにも、どもつす、と返した。

中学校に入学して一年目の春は、暖かくなるのがやたらと遅い。四月も半ばだというのに朝夕は寒いぐらいで、校庭にある桜も八分咲きで止まっている。

異常気象を訴えるテレビを横目に家を出て、自転車に乗る。月曜日の朝はありふれた一週間の始まる憂鬱とちよつとの期待と春ならではの甘い匂いと、ランドセルを背負つてひょこみみたいな黄色い帽子を被つた幼稚園児なんかを横目に、鼻歌を歌いながら時速十五キロで流れしていく。

途中で会ったクラスメイトと自転車に乗つたまま小突き合つて、おす、とふだけあいながら学校へ向かう。

市内に一つあったうちの一つの中学校が少し前に廃校になり、海の方に住んでいた中学生の多くは電車通学になった。

俺の住んでいたところは駅と駅の丁度真ん中で中途半端な距離にあるので、自転車で約三十分かけて登校する。

自転車置き場を出るときに見た桜の木はやはり八分咲きで止まつていて、俺は視線を戻して昇降口へ急ぐ。

「イッタおはよー」

聞き慣れた声が耳を揺らして、何か思い出しあつた俺はさっかに氣を取られて振り返る。

「お、りそちゃん

「おはよう

「おはよう

俺のおはよーす、はやいせりおあよーす、とちやけて聞こえてる感じで、りんちゃんはいつもそれを聞くとふふ、と声だけで笑う。

俺はガキなので氣を引きたくて、りんちゃんの前だと二割増しめる感じで喋る。

「あ

「なに、イッタ

「思って出した

「なにを」

「や、わざからなんか思い出しそうだつたんだけど」

「なに?」

「宿題やつてねー俺、英語の」

なにそれ、ばかー、とりんちやんの田元が緩んで、俺はこやつとして階段を一足飛びに上のる。

隣の教室に入るりんちやんを田で追つてから、チャイムと同時に一番後ろの席に滑り込む。

りんちやんは潮平輪廻、といつ名前で、俺は知り合つたときからずっと、りんちやんと呼んでいる。

輪廻、という名前はかなり変わつて格好いいが、りんちやん、といつ呼び名は口の中で転がすとともに舌触りがよくて、薄いカーテンや長いスカートやなんかのドレープを思い出す。

俺はりんちやんのことが好きで、肩までのまっすぐの髪も細身の肩も少し内股の足下も、ぜんぶを田で追つてしまつて困つてゐる。だけど、この町を離れて過ぐした一年か一年間の間、りんちやんに会えなかつたときは本当に毎日困つていたから、今の状況は困つてゐる中でもきっと良くなつた方なんだろう。

そう思つて、体重を掛けるとガタガタいう木の机に向かつた俺は、すぐに大きなあぐびをする。

服を作り始めたのはいつからだつたろうか。

始まりは、あまり好きじゃなかつた白の上履きと、灰色のゴムのよ
うな床を見るともなく見ていた、あの頃。

つま先で擦つてきゅうきゅうと音を立てては、よく担任の先生に叱
られた。

母親と暮らしていた頃の一時期はすゞく貧乏で、お金がない、とい
うのが合言葉みたいな生活をしていた。

毎日パートで疲れて帰る母親に新しい服を買ってとはとても言い出
せず、瘦せてウエストは緩いのに手足だけによき伸びた俺には、ずっと穿いていたジーパンの丈はかなりかっこわるい感じにな
っていた。

仕方ないので膝ぐらいの丈に切つて裾をわざとほつれさせ、ついで
に軽石で擦つて色を落としたらクラスメイトにかなり好評だつた。
いい気になつた俺は成長期をいいことに微妙なサイズになつた服を
ことじことく切り、縫い、破り、くつつけた。

その当時流行つていたプラモデルを組み立てる代わりに、見よう見
まねで布と布を合体させて過ごした。

失敗して着られなくなつたり、親のを勝手に改造して怒られたりし
ながら、いつの間にか俺は小遣いをもらえば手芸センターや生地屋
に走るというかなり変わつた少年期を送ることになつていた。

それは今も変わらず、俺の頭の中を成分分析したらきっと服とりん
ちゃんと八十五パーセントぐらいは占めているんじゃないかと思う。
そして残りの十五パーセントにめんどくさいことや最低限のことを
押し込んで、どこまで生きていけるか。

それが今のところ、十三年とちょっとしか生きていかない俺の、人生
最大の賭である。

緩い下り坂を降りきつて自転車を停めた。

今日も一日終わったな、と眠りかけていた頭を起こして、見上げた空は白く煙っている。

階段の上の窓から入る空気の匂いに立ち止まって、それから最後の一 段を上る。

部屋の隅で中途半端に古いミシンの蓋を開けると、どうしようもなくわくわくする。

図書館で借りた雑誌から模造紙に写した型紙に当てて、鋸を入れる。襟、袖、前身頃、後身頃。切り離した型紙を、裏表に一つ折りにした布に載せて、ピンで留めていく。

古い色鉛筆の水色で縫い代を取つて線を引き終えると、知らず知らず頬が緩む。

一枚の布が身体を被う形を造る。平面から、立体を造る。

一昨年の今頃、一メートル三百五十円の安い布で初めて作ったシャツは袖も裾も襟元も歪んでしまって、でも俺は肩幅がきつくなるまでずっとそれを何度も、何度も着ていた。

だけど、最近どいつもミシンの調子が悪い。

糸の絡まることが多くなったし、なんとなく動きが鈍い。

仕方ないので、最近はミシンを使うのは最低限にして、手縫いでできるものばかり作っている。

おかげで嫁に行けると豪語できるぐらいかがり縫いもすそ上げも大得意だけど、しばらく使っていしないミシンはやけに悲しそうな気がして、俺はそれを見ながらときどき途方に暮れたような気持ちにな

る。

奴の元の持ち主は、小学校の家庭科の講師の先生だった。
俺があまりにも嬉々としてそれを動かすもので、家庭科室のミシン
を買い換えるときに古くなつたのを一台譲つてくれたのだ。
そのころの俺はひたすらぼーっとしていて、無感情、無感動、と通
知票に書かれる子供だった。

別に何がつまらないわけでも嫌なわけでもなく、ただ毎日樂しいこ
とも悲しいこともなにもなくて、ただ過ぎていただけだった。
周りから見れば複雑な家庭環境つていうのもあつたのだろう、担任
の先生が結構心配してくれていたようで、珍しく夢中になつていた
からと講師の先生に頼んでくれたらしい。
白いボディがちょっとだけ黄ばんだそいつは、その時から俺の生涯
の相棒と決めた。

ミシンを踊らせている間は、何も考えずに済んだ。
布に鍔を入れる瞬間、そのことだけ考えていた
だから、
だから
服作りが好きになつた。

俺の今の母親の子どもは女の子で、夢芽、といひ。夢の芽、と書い
て、コメ。いい名前だと思ひ。

人なつこい性格で、俺のことをおにいちゃん、と呼ぶ。俺は、彼女をゆめ、とか、ゆめちゃん、と呼んでいる。

糸が詰まつた。

ここしばらくとくに調子の悪いミシンを酷使していたから、いい加減きつかつたらしい。ちょっと分厚いデニム地の布を縫おうとしたら、針の先に変なふうに糸がからまつて、取れなくなつてしまつた。仕方ないので縫いかけのところは諦めて、団子になつた糸を糸切り鋏で丁寧に切り離していく。

全部切り離して糸をかけ直し、試しに薄い布を縫つてみる。縫えないことはないが、少し雜音が多いのと、引っかかるような感じがある。

修理に出したほうがいいかな、と一人ごちる。たしか街へ出れば、ミシンの修理をしてくれる店があつたはずだ。古い型らしいけど、まあなんとかなるだろ。なんとかなるだろう。そう、何度も思い浮かべた。なぜか、不安が消えてくれなかつた。

部屋の隅に立てかけておいた今は使つていない、折り畳み式の古い木のミシン台を引っ張り出す。

これは俺の、最初の、産みの、母親が使つていたもの。俺はそれから一階の和室の隅にそれを組み立て、その上にミシンを載せた。

そして、誘われていたカラオケに参加する日のメールを送り、外へ出た。

電車代をケチつて自転車で三十分か四十分、微妙な感じの繁華街でカラオケと、ファーストフード。

健全な中学生の俺たちは、これでもじゅうぶん夜までもつ。同じクラスのカズヤ、ショウタと、隣のクラスの富田と、課長（もちろんあだ名）、と俺の五人。だいたいいつものメンバーになる。夕飯代わりのマクドナルドを出て、もつ暗くなりかけた通りを歩く。新しくできたショッピングセンターに行こうと誰かが提案し、くだらない話で騒ぎながらそこへ向かった。

歩いて数分で、まだ賑わっているそこに着き、とくに目的もないのを見てるだけー、と言つて服屋や雑貨、本屋なんかを順にひやかして回つた。

皆がそれに雑誌を立ち読みしている間に、レジの近くで文房具のためし書きの用紙にラクガキをしていた俺はふと、目を上げた。本屋の向かいの子供服売り場から、女人人がこっちを見ていた。細身で、黒のロングスカートを穿いている。俺は目が悪いのではっきりとは見えない。

そのうち彼女は急に俯き目を逸らすようにして、足元にじやれつく小さい子の手を引くと、店内に入つて行つた。

いつも、いつも、

お母さんの子どもは、一太だけだと思つてゐる。

約束は、守られない。嫉妬するのは、子どもっぽい。
あの狭いアパートで、帰つてこない再婚相手、を待ちながら、彼女

が幸せであればよいと、願つていた。

きっと彼女は今、幸せなのだろう。ついであればよいと、いつも願つていた。それなのに、

手に持つていたペンが床に落ちた。

俺はそれを棚に戻して向きを変えると、本屋の店内を小走りして、ジャンプを読んでいるショウタに向かって「うわあとばかりに膝かづくんを食らわせてみた。

うおっ、と悲鳴を上げてショウタが危つくジャンプを取り落としそうになる。

「うおおいてめーなにすんだっ」

「あ、すんません足が滑つて」

ジャンプを平積みに戻したショウタが繰り出した仕返しの足払いをしつと避けて、次にファッショングルのコーナーにいるカズヤと課長（しつこいけどあだ名だ）にちよつかいをかけに行く。

「なに、メンズノンノ？」

「課長のモテ化計画」

「うわ、ぜつてー無理っす」

「頼むから協力してくれ、切実なんだ」

「俺は危険な賭けはしないタチでね」

「ひでー よ兄ちゃん!」

「誰がお前の元一ちゃんだ」

「あれ、 富田は?」

「エロ本じゃねえの」

あ、俺も行く、とカズヤが男子中学生らしい意欲的発言をしたところで、コミックサイズの袋を持った富田に拗つて頭をはたかれた。

「おめーらうるせー、っていうかなあにがエロ本だ、俺は健全にマング買つてたつづーの」

「あ、エロ漫画か」

「ばれたか・・・って、ふざけんなつ」

それからお決まりの大爆笑したいつもメンバーは店内整理をしていた店員にちょっとだけ迷惑そうな顔をされながらショッピングセンターを出て、補導されない程度の時間に解散する。

人気のない近道を自転車でたらたら走りながら、俺たちは飽きるどころバカ話をして笑っていた。

ふと声が途切れ、海の匂いが鼻についた。

「あーあ、なんかさあこれぞ青春つて感じだね」

「ふいにカズヤが少し上を向いて、言った。」

背の高いこいつはかっこつけて乗つてこり折り畳み式の自転車のサ
イズが微妙に小さく、これこそが見える。

「なんだそりゃ」

「こや、なんかさあ、ずっとつるんでたいやな、いわしつ。うん、
ずっとつるんでやう」

約束は。

「ひっ、お前くわすれin」

「うねー、ロマンチストといつてくわ

「わかるよー」

「む、課題お前もか

「男のロマンだ」

「それは違うだろ」

「いつも、いつもで。

約束は、守られないのか？

そう、りんりんやんと一緒にいるときはまた違う屈心地の良せい、胸をちくっと刺す棘のようなものはとても邪魔に思える。

「でもちゅうとかつ」いこぞカズヤ

「だろ?」

「自分で言つか

「モテ化計画だ」

「関係ねー、あ、あるか

「ねーよ

「お、やつべ、俺こじで曲がんだ

「帰んのこ道間違えてどーすんだショウタ、頭わり」

「うひせ、話もーてたんだって。じゃーな

「おー」

「あれ、一太どこ行つた

「シャレつすか

「うお、いた

「俺」ひが

「じゃあなー」

皆と別れて少し家の遠い俺はあと十五分少々、力一杯自転車を飛ばした。

斜め上を見上げると、ちかちか光る街灯に薄茶色の蛾のよひつなのが止まっている。

潮の匂いが濃くなつて、天気が崩れるのか空はビームでも闇で黒かつた。

始まりは些細なことだった。

ある日の夕食後、父親と夢芽が喧嘩を始めた。原因は、たしか夢芽の好き嫌いが多いとかそんなことで、最近アニメの影響かめつきつゝ言葉遣いの悪い夢芽は声高に口答えをしていったが、だんだんむきになつて涙目になってきた。

「おとうさんは夢芽がかわいくないんだ

へえ、と思つ。ビックりでそんなセリフ覚えてきたんだか。

「おとうさんは夢芽のほとんどのおとうさんじゃないから、おこち

やんの方が大事なんでしょう

父親が黙った。俺は、驚いた。

すげえな、と思った。こいつ、すげえな。

俺が十三年間生きてきて一度も言つたことのない言葉を、この子は
たつた七つか八つで手に入れたんだ。

そう思つと軽くショックを受けた。

夢芽は声を上げて泣きながら、俺の横を通り抜けて和室に飛び込んだ。

少しして、夢芽、と遠慮がちに声をかけて父親があとを追つ。

俺は半間ほど開いていた襖を少し広げた。

泣きじゅぐる夢芽が暴れた拍子に、部屋の隅に置いていた古一ミシン
ン台にぶつかった。ぐらり、とそれが傾く。

危ない、と思つた。

俺は割と運動神経がいい方だから、立っていた部屋の入り口から全
力ダッシュすれば倒れるそれをおしどめることがぐらい出来るはず
だった。

そして俺は、実際瞬発的にそれを試みた。

けれど、部屋の真ん中で身体が止まった。

今度こそ、血の気が引くようなショックを感じた。

動き出す瞬間無意識にしたシミュレーションで、俺が守りつとした
のは、

義理の妹じゃなく、壊れかけたミシンだった。

古い木の台はこの間観た映画のようにスローモーションになつてはくれなかつた。

鈍い音を立てて、ミシンが畳に落ちた。その上に木の台が倒れる。蝶番がぶつかったのか、金属の音がした。夢芽はミシンから五十センチほど離れたところにしゃがみ込んで、まだ泣いていた。夢芽ちゃん、と、後ろから今の母親の泣きそうな声がした。

俺はミシンを抱えて階段を上り、部屋に行く。

針は折れていなかつたが、コンセントを挿さないまま机に置いたそれは、なんとなく不気味に見えた。

これは何だ。棺桶の窓越しに死んだおじいちゃんの顔を見たときと同じ気持ちだ。

吐き気がした。

階段を上つてくる呪音がして、いつくん、と遠慮がちな女の声が告げた。

なんすか、といつも通りに答える。

彼女は俺がいつまでたつても敬語を使うのがあまり好きではないみたいだ。不安そうな顔になる。

申し訳ない氣もするが、俺はどうしてもタメ口をきけない。

「一太くん、お父さんが、ファミレスにパフェでも食べに行こうかつて・・・夢芽、泣きやんだから。あなたも行く」

俺はいいっす、腹一杯なんで、と呟つひ、やつ、と言つて曖昧に笑い、ドアを閉めた。
きしつと軽い音を立てる。

ミシンのコンセントを繋いだ。いつものように糸をかける。

右側に付いてこるつまみを回すとき、引っかかるような違和感を覚えた。

祈るような気持ちでスイッチを入れたけれど、白がくすんだ相棒はもうぐたびれたと言わんばかりに、沈黙を守り続けた。

・・・おい、どうした、動けよ。

車のエンジン音が遠ざかるのを待つて、声に出して言つてみた。

動け、動いてくれ、

軽く叩いてみた。ぺたぺたとボディをはたいては、スイッチを押す。だめだつた。

動けよ、動いてくれよ、お願ひだから。

初めは、手のひらで。次に、拳で。

弾みで彼は床に落ち、がちちゃんと大きな音を立てた。
いつのまにか、俺は床に転がったミシンをめちゃくちゃに殴りつけながら泣いていた。

悲しくて悲しくて悲しくて悲しくて、身体の奥の何かがぐしゃっと潰されたように涙が溢れて止まってくれない。

気が狂つたんじゃないかと思うくらい、涙も鼻水も涎も絞り尽くしたとき、俺の右手は血だけで、相棒はプラスチックの身体が割れ

て悲惨な姿を晒していた。

立ち上がり、部屋の電気を点ける。洗面所に行つて顔と手を洗い、少しだけ吐いた。

外側に埃の積もった磨りガラスの小さな窓から、滲んだ月が見えた。ちょうど手を伸ばした位置にある窓を開ける。

錨の月が笠を被っていた。

俺は部屋に戻り、折れたミシン針の尖った方で二つ田のペアスの穴を空けた。

次の日は雨で、傘をさして自転車に乗った俺は知り合いで会わずに学校に着く。

いつも途中で会つてふざけ合つカズヤやショウタは、雨の日は電車で登校していたはずだ。

そういうわけで、背中にぺたんこのカバンを背負つて傘の柄を押さえて、黙つたまま自転車をこいだ。

ひよこみみたいな幼稚園児たちは自分より大きいような雨傘を掲げ、道の端に一列に並んで、静かに行進している。

「イッタ、なんかすさんでる」

昇降口でりんちゃんの声を聞いたら気持ちがぶわあっと緩んで、俺はあと少しで座り込んで泣き出すところだった。

「イッタジうした?」

「・・・つん?」

「いれ、包帯直した方がいいかも、濡れてるもん」

保健室の窓から、濡れた花壇が見える。

雨と血が滲んだ右手の包帯を解いて、りんちゃんの手が触れた。

「ハッシュンが

「ん?」

「ハッシュンが壊れてさ」

うん、そうか、とつんちやんは言ひて、乾いた包帯を一巻きして直してくれた。

「あつがと」

「うそ」

はこ、とつんちやんが笑った。

俺はどうしても笑えなかつた。りんちやんもつ一度ふふつ、と声だけで笑つて、雨の打ち付ける窓に額を付けた。

長い睫毛に縁取られた黒目がちの目は、だけど笑つてはいなかつた。

「ねえイッタ」

「なんすか」

「海に行ひます」

「今からひますか」

「うーん、じゃあ学校終わったら

「うーんちさんちやんの変なとこでまじめなとこひも、俺は好きだ。
すぐで、今すぐにでも、ヒ期待はしなかつたと言つたり、嘘
になるね」。

「どうですか?」

「わいすね

放課後になつてもまだ降り続く雨の中を、俺とくちさんちやんは海まで
歩いた。

高さ一メートルほどの堤防越しに眺める海面は風いでいたが、船の
影は見えない。

灰色に煙つた水面に、雨が穴を開けていく。

俺は笑えなくて、声を出すこともできなくて、あいつにこうのを落ち込んでいるつていうんだりつな、とほんやり考えた。前を行くりんちゅんの足下は相変わらず少し内股で、たまに危なつかしい。

だけどその背中はまっすぐに伸びて、黒い傘の先もまっすぐ上を向いていて、俺は相変わらず見とれる。

そのうちりんちゅんは堤防に登り三十センチほどの幅しかなにゃこ歩いていく。

俺もそれに倣つと、バランスを崩して向いの側のトトラポットの上に足をついてしまった。

「あぶね」

地味に心底びっくりした俺を見て、りんちゅんは笑つた。それを見て俺はやつと、笑えた。

「よかつたよね、海じゃなくて」

「運強こつすから」

「でもイッタ落ちても無事なつ、海に」

「泳ぎ得意つすから」

「イッタ、」

りんちゅんが立ち止まつた。

堤防を諦めてテトラポットの上を歩いていた俺も、また少しバランスを崩して立ち止まる。

振り返りたりんちゃんと田が合つて、海からの風が少し強く吹いた。雨がもうほとんど降つていないことに気付く。だけど空は低く、雲が覆つ正在。

そのままじばりへりへり沈黙で、りんちゃんは少し困つたよひに田を伏せた。

俺はその表情がとても好きで、ずっと見ていた。りんちゃんは何か言つようになり口を開きかけたが、そのまままた前に向き歩き始める。しばらく歩いて堤防が途切れたところで、もう一度立ち止まって今度は振り返らないまま、言つた。

「あのやイッタ」

「なんすか」

「来年の今頃、つて言じる?」

唐突なその質問の内容は信じるとか信じないの問題じゃないような気がしたが、

今、温い空氣の中海沿いを歩く、十三歳の、子供の、俺たちにま、似合つ気がした。

「私は、あんまり信じられないんだけど」

「・・・俺もっす」

「去年とか、来年の今頃こうしてゐるかな、つて思つてたこと、つていつか、当たり前みたいに信じたこと、が崩れちゃつたんだ、私」

「・・・うん」

りんちゃんと仲が良かつた北島美紅が、去年の秋から学校に来なくなりつた。

りんちゃんは多くを語らないけれど、どうやら北島は部屋から出てこられなくなってしまったのだといふ。

俺は、少しだけ、責任を感じた。

夏休みの始まつてすぐ、北島に呼び出されて、付き合つてへだわい、と言われた。いわゆる口クられたつてやつだ。

俺は、好きな人がいる、と断つた。その矢先のことだから、もし北島が部屋から出られなくなるぐらい、落ち込んでしまつたのなら、その責任の一端は俺にもあるよつた気がしたのだ。

ただ、そうならなおさら俺の顔は見たくないんじやないかと思つと、毎週北島の家まで訪ねていくりんちゃんに付き合つて家の前までは行つても、俺は中に入らずに外で待つてゐるだけだ。

その責任はどうで償つたらいいかわからなくて、そして確証もない。いつか会つことがあるつても、たぶん訊くことはないだらう。

りんちゃんが自殺未遂をしたと聞いたのは、小学校を卒業した春休みだつた。

俺はガキで、自殺なんて概念を知つてはいても持つてはいなかつた。だから本当に、本当にびっくりして、覚えていいる限り幼稚園以来に、親の前で泣き叫んでだだをこねた。

この町に、りんちゃんのいる町に、戻ると言つて。

ちょうど父親の仕事の関係もあり、俺はここに戻ってきた。りんち

やんに会つために、戻ってきた。

そして中学校に入学し、りんちゃんと再会した。

入学式、りんちゃんは平然と、何事もなかつたよつて、前を向いていた。

どうやらその事件は大事には至らなかつたらしく、小学校から中学校へ環境が変わつたのもあつてかあまり噂にもならず、先生もそんな風は見せなかつた。俺は友達伝えで聞いたので、親も知らなかつたぐらいだ。

中学に上がつてから一度、りんちゃんとそつこつ話をする機会があつた。

少なくとも遠慮がちにでも率直に訊くことのできるぐらいには、俺とりんちゃんの距離はちょうどよかつた。

家族とかに心配されない?と尋ねたら、本人は、うちは放任だから、あんまり危機感はないみたいだけど、と、言つてのけた。

夏が過ぎてからこつちは顔を合わせてもどうでもいい話ばっかりで、あまり真面目な話もしていなかつて、りんちゃんの悩みを打ち明けるときの癖で、緊張したよつて張り詰めた顎の線が懐かしく見えた。

「信じられるようになりたいとはね、思つんだけど、いや、思つてないのかな・・・わかんないや」

「うん」

「ねえ、イッタ」

「ん」

「イッタは、大丈夫？」

ぐつ、と涙がこみ上げて、俺は急いで海の方を見てそれを止めた。
海は風いで雲の切れ間から、弱々しい光がまっすぐ下りている。

「うん」

「うん、やうか」

「うんちゅん、」

「うん？」

「・・・なんでもないっす」

好きです、ヒヨウのつとした言葉は、飲み込んだ。

「うんちゅんは？」

「え？」

「うんちゅんは、だいじょぶ」

「・・・、うん」

空気が少しづつ乾いてきて、テトラポットの上に座った俺とりんち
やんは黙つたまま海を眺めていた。

気が付いたらもう夕方で、ふと斜め上を見ると真下の丸い、細い月
が、白く光っていた。

「錨に見えん？」

「あ、見える」

いかり、といつ単語は普段使い慣れないから聞き取りにくいかなと
思つたけれど、予想に反して即答された。

俺はそれがやたらに嬉しくて、立ち上がりながら声をあげずに笑つ
た。

そうして、来年は一緒にクラスになれるといいな、などと考えなが
ら、錨の奥の沈む中を家路についた。

了

錦の用（後書き）

【参照・引用】

月の満ち欠け

http://www.ksm.or.jp/astro/ka
nsoku/library/tukizenzenn.html
http://tamagoya.ne.jp/potechi
/2000/20001108.htm

* * *

第一話ですが、少し昔の話です。

紅の未来

亡くなつた姉のことを見つめたのは、中学一年の夏の終わりだつた。夏休みの宿題で自分の名前の由来を調べるというのがあって、ラーメン屋を営む両親の手書きの時間を狙つては、面倒くさがる彼らにしつこく訊いた。

海沿いにある店の一階の由来、辛い話になるかも、と珍しく真剣な顔で言られて、私はそのとき今はもう捨てられてしまつた食卓の薄茶色のテーブルの向かい側に座つて、それを聞いていた。

電車を乗り継いで、大学までは一時間ちょっとだ。

街中にあるにも関わらず鬱蒼とした緑で周りを囲む造りを、私はけつこう気に入つてゐる。

五月も半ばを過ぎて、男子より女子の多い大学の構内には、カラフルな夏物のミニールの足音が溢れています。

細いヒールで三階まで階段を使うと、運動不足の私は少し息が切れる。

九時ちょうどに始まる一限に間に合ひように教室に入ると、サキがもう真ん中あたりの席に座つていた。

染めないまままつすぐな黒髪が頬を半分隠して、難しい顔をして文庫本に目を落としている。

七分袖の白いシャツにジーパン、スニーカー。いつものように無造作な格好。

おはよう、と声を掛けて隣に座ると、彼女はおはよう、と答えて本を開じた。

そのまま少しの、沈黙。いつも先に口を開くのは、私の方だ。

「ねえねえ、明日の課題終わつた？」

「心理学のレポート？」

「そう、それ」

「あとちよつと」

「いいなーあ」

「とか言つて終わつてるでしょ、美紅は」

「うーん、私もあとちよつと」

はは、頑張ろ、と。笑う。低めの声。いつもの会話。
教室のドアが音を立てて、知り合いが何人か入ってきて、私は手を振つておはよう、に応える。

二・三言会話を交わして、サキの隣に戻る。プラスチックの椅子の背もたれに、少し深く座る。

外して机の左端に置いた腕時計が九時を指して、いつのまにか入ってきた教授がマイクのスイッチを入れるぶつ、といづれで、また今日も一日が始まる。

北島さん、と、少し低めの声で話しかけられたのは入学式だった。

彼女は私のひとつじの出席番号だった。

「席、ここでいいよね？」

あ、うん、と言つて私が椅子の後ろの番号を示すと、彼女はありがとう、と言つてそこに座つた。

あ、うん、の「あ、」がアンバランスに浮いた気がして、少し後悔した。

彼女は小柄で色白で、目の大ない子だった。

「あの、・・・北島、美紅です。よろしく」

先に話し掛けたのは私で、彼女はゆっくりと笑つてそれに答えた。

「うん、私は桐原です、桐原早紀。よろしくね」

あくしゅ、と言つて差し出された手を握り返した。細くてきれいな手だつた。

それきり彼女は積極的に私に話しかけるわけでもなく、姿勢よくまつすぐ座つて前を見ていた。

りんちゃんに似ているな、と思つたら、喉の奥がちりつと痛んだ。

りんちゃんのこと私の何と言つたらいいのか、私はいまだにわからぬ。

小学校に入学したころから中学に上がる前の私たちを知っている人は、まちがいなく親友、または、そんな思わせぶりな言葉を使わな

くても、相当仲良しの友達、と二人のことを言つただひつ。

それが嫌だつたわけじゃない。むしろ、りんちゃんのこととは大好きだった。本当に。

だけど、りんちゃんはあまりにも、私には超えられない壁を輕々と越えた。

あまりにも、私が持つていらないものを、欲しかつたものを、持つていた。

だからいつも悔しくて、私は傷ついた。りんちゃんに、嫉妬した。

そう、りんちゃんの生きづらさを、私は認めようとせずに、自分が傷ついたような顔ばかりしていった。

私は中学一年の夏から引きこもりになつたから、その後私とりんちゃんの関係を周りがどう評したかは、知らない。

進みの遅い一限は、宗教学。ホワイトボードに書かれた、輪廻転生、の文字に、反応してしまつ。

りんちゃんの名前。輪廻。

何度も生まれ変わる。業のある限りの無限のループ、なのだそうだ。

私の育つたのは、海の街。

生まれたのは違う土地らしいけれど、物心ついたときからはずつと、海沿いの道路に面したラーメン屋、その二階の自宅で、両親と三人

で暮らしていた。

ざわざわした店の雰囲気は、あんまり好きではなかった。

工業地帯と住宅地のちょうど境田ぐらいた店は、工場で働く人のお昼休みにはいっぱいになつて、労働者の男の人、大きな声や乱暴な物言いや独特のがさついた空気が、私は苦手だった。

今は、母は食品会社の下請けで加工工場のパート、父は知り合いで中華料理屋を手伝っている。

ラーメン屋は、引っ越ししたときに閉めてしまった。

下ろされた暖簾を私が目にすることはなかつたけれど、紺地に白く

「ゆみちゃん」と抜かれた文字はよく憶えている。

ゆみ、みく。

自分の名前の由来と、小さい頃から不思議にも思わなかつた店の名前の、由来。

両方を同時に知つた。私が生まれる前に亡くなつた姉の名を、両親は大事に抱いていた。

卑屈だつた私は、私の名前は私ひとりのものだけでは、意味をなさないと感じてしまつた。

そしてその次の次の日、から、私は自分の部屋から出られなくなつてしまつた。

“ つんちゅんはいいじゅん、いい名前だと思つけどな ”

“ でもむ、うちのお姉ちゃんユキコだよ、ユキコ。何の関係もないじゃんね、しかもめつちや普通の名前じゅんね、なんでユキコの下

“ が輪廻なんだ”

“ ・・・関係ない方がいいじゃん、そんなの”

“ まあそつだけども・・・”

まあそうだけども、なんでこんなに居心地が悪いんだ？

ぼそっとそう言つたりんちゃんの細い顎の線が震えていて、そういうふうにじつをりんちゃんが弱音を吐くのは、とても珍しいことだったのに。

それなのに、私はそれを認めたくなかった。

自分の存在価値が否定された出来事を、りんちゃんのいう居心地の悪さより、ずっとひどいものだと思っていた。

自分の話ばかりを聞いて欲しくて、自分が傷ついていたくて、りんちゃんは何も知らなかつたのに私は自分が否定されたような勝手に傷付けられたようなプライドを折られたような気持ちになつて、それをりんちゃんに知らせたくつてりんちゃんに傷付けられたと思いつこみたくつてりんちゃんに傷付けられたと言いたくつて被害者ぶつてわざとそうしたくつて乾いた声で笑つた。

“ ははっ、何それー”

ため息を吐いてみた。海は蒸し暑く凪いでいた。
とげとげした気持ち。りんちゃんは黙つていた。

翌朝起きようとしてみたら身体が重くて重くて、冷房をかけていたら寒くて冷房を切つてみたら暑くてとりあえず温度を最低にして毛布を被つてみたら、もう一步も動けなくなつていた。

秋になり冬になるにつれて部屋は寒く寒くなり、私はやっぱり毛布を被つたまま、エアコンの温度だけをどんどん上げていった。

中学に入学した年、好きな人がいた。同じクラスの海原一太。夏休みに入る前、私は告白して、ふられた。好きな人がいる、といつて。

その好きな人、が、りんちゃんのことだということを、私は知っていた。

その日は一学期の終業式で、暑く、晴れていた。みんなんぜみがうるさいほど鳴いていた。

カラーを抜いた海原の学生服の襟元を、私はずっと見ていた。

海原のことを名前で呼ばなかつたのは、りんちゃんが彼をイッタ、と呼び捨てにするみたいに名前で呼ばなかつたのは、あえて海原、と苗字で呼び捨てにしたのは、私のことをいちども名前で呼ばなかつた彼への、幼稚な仕返し。

引っ越してすぐに知らない人ばかりの中で入試を受けて、決まつた高校の制服は淡いブルーのスカートで、私はまるで戦場に行くような気持ちでそれを着た。

それを脱ぐころ、私は当たり前のようになつて、外に出て、喋つたり、笑つたりできるようになつていた。

だけど、根本的なところは何一つ、変わっていない。

私は、あの薄暗いむつとした部屋で毛布にくるまつて震えながら、

彼女に嫉妬して、傷ついて、手ひどく傷つけ続けている。

地下鉄の階段を上ると、額に汗が滲んだ。立ち止まり、首筋にかかつた髪を払う。

だいぶ暑い季節になってきた。講義が早い時間に終わる火曜日の、午後二時。

いつもなら夕方から行くバイトが休みになつた今日は、ちょっとだけ非日常の気分だ。

駅前通りは土日ほどではないが、人が多いのは変わらない。

鬱陶しいキャッチをシカトして、早足で歩く雑踏。流行りのウェッジソール、ヒールのサンダルに白のスカート、水色のカットソー。どこにでもいる、みんなと同じ、平均的な女の子に見えるんだろう。そう考へると、不思議な気分になる。

誰だってそうだ。みんなと同じでありたい気持ちと、自分は自分でありたい気持ちが同居しているのが、良くあるパターン。

それを見透かしていることに優越感さえ感じてしまう私は、認めたくないだけできつといちばん平均的な、そのパターンなんだろう。通りに並ぶショッピングの路面店に立ち止まる。綺麗にコーディネートされた洋服を手に取る。

その行動のひとつひとつが、まるで予定されたように流れていって、店先に漂うレゲエのリズムに、嘘でも少しだけ気分が高揚する。

歩道の端の駐輪スペースにある低い柵に腰掛けて人の流れを見ると

もなく、眺める。

人間観察、楽しいよねつと言つたら、りんちゃんは。人間にはあまり興味がないの、と、返してくれたつ。海を見ている方が、おもしろくはないけど、飽きないんだと言つていた。

最近、私はりんちゃんのことばっかり思い出している。

りんちゃんと最後に会つてから、もう五年経つた。

そろそろ時効なのかも知れない。そもそも、私はちゃんと向き合わなくてはいけないのかも知れない。

りんちゃんはもう私のことなんて忘れてしまつてるかも知れないけど、もし忘れないないとしたら私はりんちゃんに、ずっとつらい思いをさせ続けているのだから。

人の流れを見るのは楽しい。当たり前だけど、ひとりずつの人生を背負つて生きてる。

派手な人、地味な人、早足の人、ゆっくりのひと、学生、会社員、おしゃれな人、そうでもない人、それぞれの舞台で、暮らして。集団に紛れて。ランク付けされて。自分を守つて。

楽しくなつたり、無理したり。笑つたり、落ち込んだり。それはとても興味深い。

こんなふうな漠然と思うことを、りんちゃんに伝えたんだったかは忘れてしまつた。

同じこと、サキはどう思つかな? 大学の友達は? きっと聞かないけど、もしかしたらのときのために忘れないでとつておこう。

「北島」

ふいに呼ばれて、斜め四十五度を振り返った。思つたより近くにいた声の主は、変わらないひょろつとした立ち姿。緑のTシャツに、だぼだぼのジーパン。もとから茶色っぽかつた髪は、もう少し色を抜いたのかも。

薄い胸板も猫背のシルエットも覚えていたとおりだけじ、背はだいぶ伸びて、表情は大人びたような気がする。

「・・・海原」

「うひっす」

「なんで?」

「なんでって、買い物っす

「やう」

「あー、今住んでるとこがここから近へぐ」

「せう、なんだ」

「歩いてたらなんか知つてゐやつがいでびびつた」

「私もだよ、びっくりした、こんなところで会つなんて

笑う。私はちゃんと笑えてゐる。そのこと、少し驚きやえした。

「私が」のくんに住んでゐて知つてた?」
「や、知らんかった、近いの」
「や、知らんかった、遠いの」

「うーん、うん、電車で一時間とか」

「遠いじゃん」

「やうかも」

なんだそりゃ、と笑う。

笑うとき、少し頭を伏せて口角を上げる癖も、そんなところだけ、本当に。変わらない。

「学校が、二つから一駅なんだ」

「ふーん、学校、短大だつ」

「うーん、四大、それも知らなかつたっけ」

「知らんかった」

「りんちゃんに、聞いたりとか」

「・・・りんちゃんは、やうこつ話はせん、ってか、りんちゃんも
知らんと思つた」

「・・・、そつか」

うん、と言つた海原が少しだけ気まずそりこしたので、それで、なぜか、私は救われた気がした。

「海原は」

「服屋つす」

「今も、服、作つてゐるの」

「やつづすね」

専門学校を卒業したあとショッピング店員のバイトをしながら、服を作つて店に置かせてもらつたり、デザインコンテストに応募したりしているのだと言つた。

「ねえ海原」

「なんすか」

「つとちやんに会いたい」

海原は、心底意外そうな顔をした。

家に帰ると鍵が閉まっていた。

鞄の中を探る。ドナルドダックのキー ホルダーがなかなか見付からない。

携帯のメモリ、ずっと知っていたひとの名前をあらためて登録するのは変な気持ちがした。

連絡する、と言つてしまつたから、ずっと落ち着かない。

この街は、海が見えない。

私の部屋は日当たりはいいけど、見えるのはひだりのベランダと、隣の家の庭だけだ。

カーテンの色が黄色く揺れている。

五限目が終わって、田の暮れかけの時間。窓辺に寄つてグラウンドの向こうに見えるのは、雲の多い空と今日の作業を終えた工事のクレーン車。

「ねえねえ、課題終わつた?」

「明日の?」

「ひひん、来週の月曜の」

「全然、週末にやるつかなあ」

「土日バイトなんだよ、どうしよう、今日帰つて図書館行かんと、まだ参考文献も決めてないもん」

「学校の図書館は？」

「なんか、いい本なかつたんだ」

「大丈夫、美紅ならなんとかなる」

「うへへ」

苦笑い。こつもの私たちの会話。

「なんか、いつも回じよつな話ばっかしてるねえ」

はは、ヒアルトの声でサキが笑う。
本当におもしろがっているのかは、わからない。
急に知らない人が隣にいるような気分になつて、私はじきつとした。
いらいらする。なんでか、とても。

「・・・課題の話ばっかりかも」

「うーん」

「なんか他の話しようよー」

「なになに」

自分から喋つてくれればいいのに。サキは話題を作らない。誰と話すときもそうだけど。

平気な顔をして、黙つたまま一緒にいる、をする。

なんて、なんて私は子どもっぽいんだろう。田を逸らして、沈黙した。しばし。

「だつて、大学の友達にそんな重大な話しないしなあ」

ほんとうに小学生みたいなガキっぽい意地悪で、軽く言つた一言、のつもりだった。

口に出してしまってから、しまった、と思った。
じんと唇が痺れるようになつて、机の端に手をついた。
誰かが出したままにしていた椅子に、そのまま座る。
なーんてね、とか、でもサキは違つよ、とかフォローした方がいいのかも知れないと思つたけど、私は何も言わずに、何も言えずに、その瞬間を諦めかけた。

いつのまにか、教室には私たち二人と、ドアのあたりで固まって喋つている女の子二、三人しかいなくなつていてる。

曇り空。雨が降りそうで振らない天氣。
重く湿つた雲は、あの街を思い出す。

蛍光灯の白色がしらじらしい。私は泣きたくなるよつたな気分で、暗い空を見上げた。

サキが立ち上がりつて、椅子に横向きに座つていた私の前に立つ。
少し見上げたところに、サキのジーパンのウエストあたり。
腕と顔のラインの細さに比べたら下半身がぽつちやりしているサキ

は、だけどとてもバランスのとれたきれいな身体をしていると思つ。サキのふともものあたりに、視線を移した。

「みぐ、それは失礼だ。私はこんなだから、自分から話すのは苦手だから、だけど美紅が話したいことあつたらちゃんと聞くし、言つてくれたらちやんと話すよ? そんなふうに言われたら、傷つくな

ごめん、と私は言つた。「ごめんなさい。

その言葉は驚くほど素直に、声になつた。

ごめんなさい。サキ。ごめん。

もう、これ以上、私のぐだらない意地つ張りやプライドの高鳴りで、誰か傷付けるなんてごめんだつた。

悔しいからつて「好き」を「嫌い」に無理矢理変えて、いいことなんてなかつた。

いい加減に捨てなきゃいけないと思い続けて、やつと少しだけ、振り払えた気がした。

だけど、ほんとうに、本当に私は何も変わっちゃいなかつた。自分を好き、とか嫌い、とか考えること自体、自意識のうちだと思つていたけど、今の自分は間違いなく大嫌いだ。

私の未来には、海は要らないと思つていた。

彼女が時折口ずさんだ、タイトルも聞かなかつた古い歌と同じよつに。

だけど、暗い海。曇り空。そこの切れ間からりんと海上に射す光。それはほんとうに彼女によく似合つ、弱々しくてまつすぐな光。私には、届かない。

私には、海がない。

あそこから逃げてきた私は、あの暗い海を、いつも曇っていた春の海を、凧いだ夏の海を、重く寒い冬の海を、私にはりんちゃんや海原みたく、ちゃんと見つめているだけの度量はなかった、それだけの、私のせいだけのことなのに。

「『めんなさい』。サキの目が少し赤く染まっていた。

外はもう真っ暗になつて、今から急いで帰つたつて市立図書館はとつくに閉まつちゃつてゐるだらうし、学校の図書館ももうすぐ閉まるだらうけど、時計のないこの教室では正確な時間はわからないけど、一つ離れた場所に置いた鞄からケイタイを取り出す気力が出なくて、私たちは沈黙した。

さつきよりももつともつと痛くて、怖い沈黙。ドアのところで喋つていた人たちもいなくなつていて、一本切れかけた蛍光灯がじじ、と弱い音を立てた。

「『めんなさい』、と私はもう一度言つた。

「・・・うん、もう許した」

「『めんなさい』」

「うん」

「『』めん」

「うん」

「・・・」

「・・・」

今度の沈黙は、あまり怖くなかった。
サキはその小柄な身体でとてもしつかりと立っていて、悔しいけれど私は甘えてしまう。

それは、とても自然な感情のように思えた。

「・・・なんか、お腹減ったな」

「ミスドでも行きますか」

「いいよ」

平日の夜のミスドは、仕事帰りっぽい人たちがお持ち帰りのドーナツを買うので混んでいて、レジでしばらく待たされた。

おかげり自由のアイスカフェオレとオールドファッショングを注文して、先に席に着く。

向かいの席に、当たり前のように、サキが座る。

黄色いトレイの上にはカフェオレと、オールドファッショング。

「あ

「ん

「同じもん頼んでる」

「お、お嬢さんお揃いですねえ」

珍しくおどけた口調に、私は笑った。

一緒になつて照れるよつに笑つたサキの顔を、久しぶりにちゃんと見た気がする。

向かい合つて座つた誰かの顔を、久しぶりにちゃんと見た気がする。

サキに、りんちゃんのことを話した。

ひきこもりだつた一年と半分の、りんちゃんも知らない私のことも。サキは何も助言めいたことも慰めも言わなかつたけれど、ただ、うん、うん、としつかりと目を合わせて、頷いて聞いてくれた。

泣きそうだつたけれど、私は泣かなかつた。

聞いてくれてありがとう、の一言は、帰り際の電車に乗るぎりぎりになつて、やつと言えた。

サキはまじめな顔をして、うん、こちらこそ、と言つた。

人の流れに混ざつて振り返らずに電車に乗つて、窓際の席に滑り込んだら、じわつと涙が出た。

街の夜景に頬杖をついたまま、海原と会つたときのことと思い返してみた。

好きだつた、ひと。

だけどガタガタの木の机が並ぶ教室で、彼の姿を見るたびに感じていた焦がれるような感情は、どうやらもう起らなくなつていた。

あのころ海原を見るたびに思つたのは、飄々とした表面の中に押し

込めきれない痛さや脆さ。

私はきっと、それに惹かれていた。りんちゃんに惹かれたのと、りんちゃんに嫉妬したのと、同じ理由で。

今は克服したのか、うまく外に出れない方法を身に着けたのか。それとも、あの頃壞れそうに思っていた彼へのイメージは、ただ私の思い込みや理想だったのかも知れない。

二件もらつた番号の、片方、メモリに入れられなくてメモだけ持つていたぶん。

番号を押していく。海原のことだから伝え忘れられてるかもしれないけど。

どっちにしろ緊張はとけそうにない。心臓が速い。

ふつふつふつ、という音で、ホール音を待つ。

受話音量を上げていたせいか電波の悪いせいか、ざわざわした音が耳につく。

「はい」

「・・・、りんちゃん？」

「美紅」

「ひさし、ぶり」

「うん、」

りんちゃんの声。実感がない。

五年ぶり。そんな久しぶりに思えないよつな、ずっと懐かしきような。

りんちゃんのことについて海原からほととど何も聞かなかつた私は、電波の向こうのやうがどこなかもわからないのだけど、りんちゃんの部屋の窓から見える工場地帯と海と、フローリングと薄い水色のベッドカバーを思い浮かべた。

「イッタに聞いてた」

「あ、そつなんだ」

「うふ、電話くるかもって言つてた」

「やひ、こないだ会つたの、偶然」

「美紅」

「うふ

「私も、会こたいけど」

「うふ

「美紅は、大丈夫なの」

目を閉じる。

りんちゃんの背後から海の音が聞こえるかと思つて耳を澄ましてみたけれど、その向こうにはただかすかな息づかいと、ちらちらと電

話の雑音が流れるだけだった。

「大丈夫じゃない」

「うん」

「かもしれないけど」

「うん」

「やつぱり会いたいな、りんちゃんに」

苦笑いのように、少しだけ笑った。

わかった、と、言つたりんちゃんの声は笑つていなくて、少しだけ上擦つっていたような気がした。

怖いのは、私だけじゃない。

急ぎの用事でもないのに口時をもう決めてしまったのは、勇気がしほまないうちに。

じやあね、と電話を切ると同じぐらいに、部屋のドアがノックされた。

「美紅、じはん」

すぐ行く、と母に応えた自分の声が自分のものじゃないみたいに、頭がぼうつとなつて遠く聞こえた。

だけど、私はその決心が鈍らないうちに階段を降りて、食卓に座つて、母の作つた麻婆豆腐と大根のサラダを食べる。

黒いテーブルの縁の色が剥げかけている。

「お母さん、テーブルはげてる」

「ほんとだ、マッキーで塗つといつか」

「ありえないありえない

笑う。母と私。

父は座イスでテレビを見ながら、こつのまにかこびきをかけている。まつたく、と、母が苦笑する。

「お父さん、帰つてくるなつせつわとお風呂入つてご飯食べちゃつて、いつのまにかあれよ

なーんか年取つちゃつたんだから、とため息をつく。
母ももういい年だけれど、私にはいつまでもただ、母で、小さい頃のイメージなのか、あまり変わらなく見える。

父と母は仲がいい。一人で豪快に笑う声を聞くことが減つた気がするのは、きっとお互いの仕事の都合で、昔より一緒にいる時間が少なくなつたからだひつ。

私の中で、故郷の海はいつもどんよりと曇つていた。

けれど今、電車の窓を流れる景色は晴れていって、海も遠くこもひさらと水面を反射している。

日差しが強くて、木々の影が濃い。

一両の電車、改札しかない駅に若い駅員さんが立っている。会釈をすると、敬礼を返してくれた。

前はもっと年のいった人がいた気がするけど、その人の息子さんだろうか。

古びた駅舎は、思いがけず新鮮な感じがした。

海に近付くにつれて、早足になる。

どんどんと胸が波打つて立ち止まる。呼吸が速くなっている。落ち着けて、ゆっくり。

歩く。待ち合わせの時間にはまだ早くて、私は堤防に座って海を見た。

海面を映す太陽が、海に向かうとまっすぐ目にに入る。眩しくて、視線を逸らした。

堤防のすぐ後ろはアスファルトの道路、私が住んでいた家は改築されて、間口の開いた食堂のよくなっていた。やっぱり、工場の昼休みには混むのだろう。

ふと太陽の残像の残る日が、向こうから歩いてくる、細い影をとらえた。

テトラポットの上をたどってふわふわと漂ってきた彼女は、一メートル手前で立ち止まった。

「久しぶり」

「うん、久しぶり」

声が掠れたのはお互い様で、だけど一人とも笑わずに。りんちゃんは私の隣に座り込んだ。

まっすぐの黒髪が肩の下まで伸びている。ワンピース。細い脚。変わらないようで、やっぱり、大人っぽくなつたようだ。

「五年ぶり、だね、りんちゃん」

「うそ」

「え？」

「五年じゃない」

「・・・」

「覚えてないならいいよ」

拗ねたように言って、口を尖らせるようにして笑う。そういえば、りんちゃんはこんな剽軽な表情もするんだつたな、と思つたら、気持ちが解けた気がした。

「あ」

思い出したのは、白くくすんだアスファルトの足下。灰色の毛布の隙間から見た、内股気味の靴もど。

「叶つたんじゃない？」

美紅、またね、と言つてくれたんだつた。

「ありがとう、会いに来てくれて」

ありがとうございました、会ってくれて。そう言った。
小さな声で海の方を向いたまま、呟くよつたから、ふと確か
めるよつに鱗を見た。

私は、泣くかも知れないと思つていた。緊張か、懐かしさ、苦しさ、
そんなものに襲われて。

だけど、横目で見たら体育座りで膝を抱えた彼女の姿に、涙も苦し
い気持ちも飛んでしまった。

「私、泣くかと思つてたの？」

「うそ」

「先に泣かれちやつたらなあ」

伏し目がちに長い睫毛の先からぽろりと水滴を落しながら、り
んちゃんは泣き笑いの顔をした。

夕方まで、海にいた。言葉は交わしたり、途切れたり。
閉じこもっていた部屋でのことは、りんちゃんには話さなかつた。
その代わり、海原と会つた日に考えていたことを、伝えてみた。

「なんか、前にもそんなこと言つてた気がする

「話したつけ」

「わかんないけど」

「そうかもね、なんか進歩ないなあ、私」

そんなことない、お互い様だよ、とりんちやんが言つて、私たちは久しぶりに、顔を見合させて笑つた。

これは、実に五年ぶり。

そう言つたら、しつこい、と突っ込まれた。

夕焼けに少し涼しい風が腕を撫でて、立ち上がる。

工場の労働時間が終わつたのか、後ろの道路を車と自転車が何台も通り過ぎる。

視線の端でお姉さんの暖簾が揺れて、私はまた海の方へ向き、田を細めてりんちやんの隣で、深く息を吸つた。

紅の未来（後書き）

【登場人物】
潮平輪廻
北島美紅
海原一太

*

三部作完結です。

りんちゃんがどのような進路を進んだのかは永遠の謎です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9176s/>

海の夢

2011年10月9日00時50分発行